

【「総合的な学習の時間」の評価の考え方・進め方（高等学校編）】

(1) 「総合的な学習の時間」における評価の基本的な考え方

ア 評価の主体と対象

高等学校では、小・中学校より1年遅れて平成15年度から新教育課程が実施され、学校週5日制の下で「総合的な学習の時間」（以下この時間と表記する）がスタートする。この時間の評価を行う場合には、まず評価の主体と対象を明確にしておく方がよいと考える。図1に示すように、その主体と対象は幾つか考えられ、また、どの主体がどの対象を評価するかについては何通りも考えられる。

昨年度、本教育センターが行った県立高等学校(38校)のアンケート調査結果によると、平成14年度までに33校が実施するとしているが、その評価に関してはほとんどの学校が検討中との回答であった。また、平成12年度から試行に入っている学校もあるが、「実践は行ったものの、生徒に何を身に付けさせたのかははっきりしない」といった反省を聞くこともある。そこで、各学校が実践するに当たり早急に検討すべきものとして、主体を教師と生徒、対象を生徒とし、評価を見据えた計画の立案や実践の方策

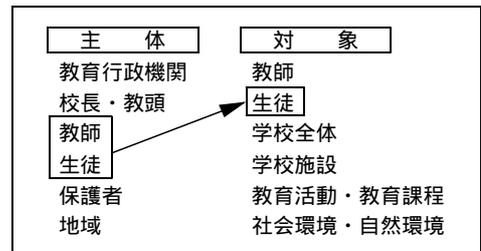


図1 評価の主体と対象

に関して、教師による評価はもちろん、生徒自身（自己評価）の評価の在り方についても研究を行った。なお、この時間の創設に至る経緯や実践上の課題等については、平成11年度と平成12年度の本教育センター研究紀要第24集別冊、第25集別冊「総合的な学習の時間」を参照していただきたい。

イ 評価の基本的な考え方

この時間は、「生きる力」の育成の必要性や現代的な課題への対応の充実などを背景として創設され、各学校で学校や生徒の実態や特性等に応じた学習活動を定め、特色ある教育活動を展開する。この時間の学習活動では、学び方や問題解決能力等を育成する活動を行うため、各教科の評価の際に行われるペーパーテストを中心とした方法で行うことは難しいと思われる。この時間の評価について、高等学校学習指導要領解説の総則編では次のように示されている。

生徒自らが設定した課題や学習計画、追究の過程を自ら振り返り、評価し、改善を図っていくことは、この時間のねらいを実現する上でも極めて重要な役割を果たすものである。学習活動を通して、感じたこと、探究したこと、学んだことを振り返り、その課題について今後どのように関わっていくべきかを考えることが大切であり、活動全体を振り返り、自己の在り方生き方について考えを深めるための評価を工夫する必要がある。

また、文部科学省は、「指導要録の改善等について」の通知（平成13年4月）の「高等学校生徒指導要録に記載する事項等」において、「総合的な学習の時間の記録」に「学習活動」と「評価」の欄を設け、文章で記述することを提示した。「評価」の欄については以下のように示している。なお、この時間は生徒に必ず学習させ、修得を認定した場合は各教科・科目等の学習の記録の欄に修得単位数を記録することとしているが、卒業までに修得させる単位数に含めるかどうかは各学校の判断に任せられている。

各学校が定めた総合的な学習の時間の目標、内容に基づいて各学校が設定した評価の観点を踏まえて、生徒の学習状況に顕著な事項がある場合などにその特徴を記入するなど、生徒にどのような力が身に付いたかを文章で記述する。

観点については、高等学校学習指導要領第1章第4款の2に示された総合的な学習の時間のねらいなどを踏まえ、各学校において具体的に定めた目標、内容に基づき定める。（下線は本研究委員会による）

このように、学校や教師には、この時間の学習活動を通して生徒がどのような力を身に付けたのかを的確に見取るための評価の工夫が求められている。また、生徒が身に付けた力を更に伸ばしていくことができるようにするための支援的な評価（指導と評価の一体化）も求められていると言える。

この時間の学習活動においては、生徒個人あるいはグループによりそれぞれ異なる活動を展開していくため、1人の教師だけで評価することは難しく複数の教師で評価することとなる。このため、各学校に課せられているアカウンタビリティ（説明責任）の視点からも、すべての教師の共通理解の下、各学校において評価の観点を定めることが必要である。また、この時間の評価を確かなものとするために、各学校で多面的・多角的な評価規準¹を設定し、多様な評価方法を組み合わせた評価が必要であるとする。

¹ 各教科・科目においては、「関心・意欲・態度」「技能・表現」「思考・判断」「知識・理解」といった4つの観点の下に、何を評価するのかといった評価のよりどころとなる質的な評価規準を定め、その規準における到達度を観るための尺度としての評価基準を各学校で設定し、それに照らして評価を行うのが一般的である。

(2) 評価の観点と規準

この時間の評価を行うに当たっては、学習指導要領に定める2項目のねらいを受けて、各学校で定めた目標や内容を踏まえた評価の観点を設ける必要がある。評価の観点とは、生徒が行う学習活動をどのような側面から捉えたらよいのかを示したものである。

教育課程審議会「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について」の答申において、小・中学校に示された観点を図2に示す。高等学校にはこのような観定の例示はなく、「

評価に当たっては、各学校において指導の目標や内容に基づいて定められた観点を踏まえて行うこととすることが適当である。」

とされている。また、以下に示すように、高等学校では、「思考力」「判断力」「表現力」が特に強調されていることも考慮した方がよいと考える。

ねらいを踏まえた観点例
「課題設定の能力」
「問題解決の能力」
「学び方、ものの考え方」
「学習への主体的、創造的な態度」
「自己の生き方」
教科との関連を踏まえた観点例
「学習活動への関心・意欲・態度」
「総合的な思考・判断」
「学習活動にかかわる技能・表現」
「知識を応用し総合する能力」
その他の観点例
「コミュニケーション能力」
「情報活用能力」

図2 小・中学校の観定の例示

【小・中学校】 児童生徒のよい点、学習に対する意欲や態度、進歩の状況などを踏まえて適切に評価する。

【高等学校】 学習に対する意欲や態度、思考力、判断力、表現力、活動の過程で進歩した点などを適切かつ総合的に評価する。（各校種の学習指導要領解説総則編の「総合的な学習の時間の評価」より）

図3に示すように、観点を定める場合には、図2の観定の例を参照にするなどして、各学校の教育目標やこの時間の目標を踏まえるとともに、育てたい資質や能力などを考慮して幾つか設定する。例えば、「自らの意見や考えをもつこと」「論理的に表現したり討論したりする力」「社会に対する認識を深め自己の生き方や在り方について考え、主体的、自立的に学ぶ力」などが考えられる。また、各学校がこれまでに取り組んできた高校教育活性化事業などでの成果を考慮することも考えられる。幾つかの観点を設定したならば、各学習活動においてどのようなところを評価していくのかを示した評価規準を設定することが望ましい。これは、教師の一人一人が評価の根拠を明確にし、複数の教員が共通理解の下に多面的・多角的な評価を行うために有効なものであり、また、それを生徒に知らせることにより、「何を学ぶか」を明確にし、自己評価能力を高めるためにも有効なものであると考える。評価規準の設定においては、

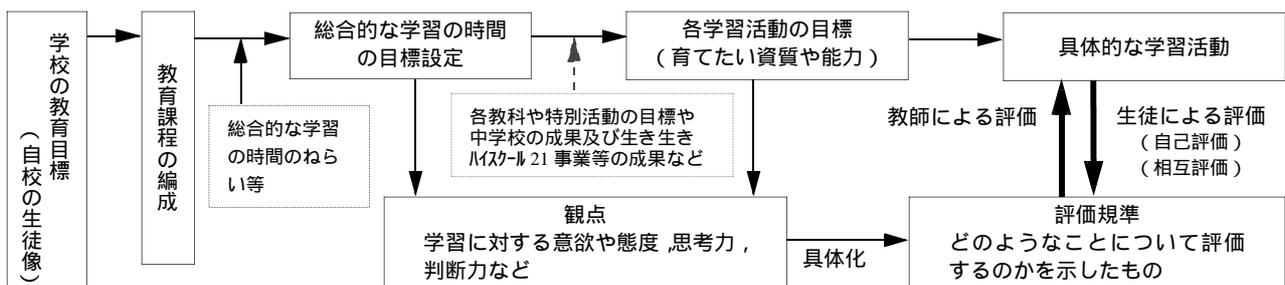


図3 評価の観点等の設定の概略

生徒の学習活動の様子をきめ細かく見取るためにも、より具体的な評価規準を設定した方がよい。図4にその一例を示すが、いずれにしても各学校において十分に検討することが大切である。なお、職業学科において課題研究等で代替する場合は、以上のことを踏まえて評価の観点や評価規準を検討することが望まれる。留意点として、評価に当たる際は、評価のための評価とならないようにするとともに、原則として個人内評価²を行うことに留意する。また、生徒一人一人の自己の在り方生き方についての考えを深めさせるためにも、相互評価等を考慮した生徒自身の自己評価などを加味して評価し、更に高いレベルへと指導や支援を行っていくことが重要であると考えられる。

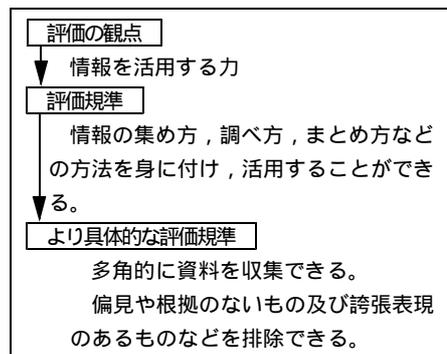


図4 評価規準の設定の例

² 個人内評価とは、生徒一人一人の過去と現在における比較を行い、よい点や可能性、進歩の状況などを評価するものであり、「自ら学び、自ら考える力」「問題解決能力」などを育成するためにも重視されている評価である。

(3) 評価の方法

ア 評価データの収集

評価の観点等を設定したならば、次に、具体的にどのように評価を進めるか、つまり評価するためのデータをどのように収集するかを検討することになる。高等学校学習指導要領解説の総則編第3章第4節「9 総合的な学習の時間の評価」には、参考となる事項が次のように示されている。

評価の方法としては、例えば、レポート、論文、作品などの制作物、発表や討論の様子などから評価したり、生徒の自己評価や相互評価を活用したり、活動の状況を教師が観察して評価する。

評価のデータを収集する際の評価対象と評価可能な力等との関係として考えられる例を図5に示す。意欲や態度といった情意面の評価については、表1に示す観察法と面接法を中心とした方が望ましいと考える。これらは短期型の評価方法として有効であり、生徒個人や集団への支援の方策の視点を得るには適した方法である。この方法を用いる場合には、各学校において設定した評価の観点等を考慮した自己評価表や相互評価表などを活用するとより効果的であると考えられる。

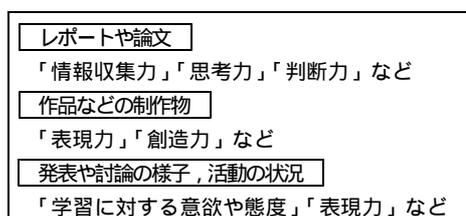


図5 評価対象と評価可能な力等の例

表1 観察法と面接法の概要

観 察 法	自然観察法	<外部観察> 主に興味・関心や学習に対する意欲や態度、他人に対する態度等、内面の行動の表出を観るのに適している。記録をすることで、「活動や学習の過程」も観ることができる。 <内部観察> 主に生徒の悩みや劣等感、憤り等の抑圧や価値意識を観るのに適している。
	実験観察法	実験観察は、ある条件による拘束をして、その状況や変化を観る方法である。発表会や紙面による発表、ホームページへの掲載などもこの方法の対象となる。
面 接 法	調査面接法	生徒の興味・関心、学習をする上での環境や学習状況を知るための方法である。この方法には指導や相談は含まれない。
	相談面接法	主に生徒の悩みや劣等感、憤り等の抑圧に対処する方法である。同情ではなく、共感（理解）するといった支持的な態度で行うのがよい。時には臨床的な面接となることもある。
	ガイダンス	指導を伴った面接法であり、能力や性格、興味・関心、方法、学習技術能力等を加味しながら生徒に接する。ここに示した方法の中で最も指示性がある。

イ ポートフォリオ評価

「活動の過程で進歩した点」などについての評価は、最近注目されているポートフォリオ評価が有効であると考えられる。ポートフォリオ評価とは、ポートフォリオ（書類蓄積整理袋）に、生徒の学習活動における様々な書類等を蓄積、整理し、これを評価の資料として活用する評価法である。この評価

法は短期型の評価よりむしろ1学期間や1年間といった長期型の評価を行うのに適しており、生徒自身に活動を振り返らせ、自己評価力を伸張し、自己の成長を自覚させるといったメタ認知の力を高めることにも有効である。図6に示すように、この評価を行う際には、課題の設定から調査・研究する段階で用いるベーシックポートフォリオ(BP)と、学習活動のまとめに用いるサマリーポートフォリオ(SP)の2つを作成させるとよい。

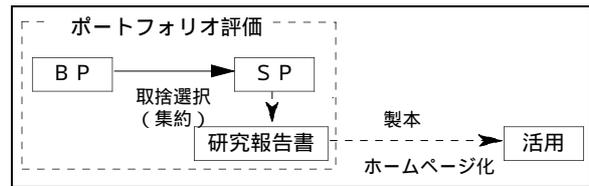


図6 ポートフォリオ作成とその活用

生徒が作成した作品
レポート、作文、絵、ポスター、発表の際の記録メディア(VTRや写真等)、本など
活動の記録が分かるもの
研究構想、下書き、メモ、収集資料、新聞の切り抜き、班の会議記録、インタビュー記録、活動を記録したメディア(VTRや写真等)など
自己評価の記録
活動計画表、反省や点検などのチェックリスト表、自己評価表など
相互評価の記録
生徒同士による相互評価表、親や地域の人による評価、教師による評価など

図7 BPにファイルする具体例

BPは、学校の基本方針、年間計画、提出期限、自己評価や相互評価の際の注意事項及びBPとSPの作成要領、そして、生徒各自の研究計画書を綴らせた後、図7に示す学習活動で得た各資料等をファイルさせるものである。生徒自身の振り返りやSP作成時に活動の進捗状況などを明確にするため、時系列に並べ、日付等を記入させておく。SPはBPを取捨選択して集約し、研究の過程や成果、今後の課題などをまとめたものであり、ページ数は要約力や表現力を考慮し10ページ以内などと制限した方が望ましい。

図6に示すように、できれば研究報告書を作成させ、それを学校において製本して図書館に陳列するか、ホームページ化して生徒用校内LANなどにアップロードすることも考えられる。これを活用することで、後輩たちのこの時間の研究等を更に発展させることができるものと思われる。なお、BPやSPの保管については、一括保管又は生徒保管のどちらでもよいが、個人情報が含まれていることも多いため、取扱いに注意するよう指導したい。特に、研究報告書は公表するためのものであるため、個人情報等の保護に留意させる必要がある。

評価に当たっては、BPを用いることにより指導や支援を包括した形成的な評価を行うことができ、SPや研究報告書からは図5に示したレポートや論文、発表などと同様な観点等で評価を行うことができる。留意点として、この時間は生徒各自が異なる課題に取り組むため、あくまでも生徒一人一人についての個人内評価を念頭に置き、生徒の進歩した点や身に付けた力などを観察法、面接法、BP、SP及び研究報告書などから的確に見取り、評価することが大切であると考えられる。

(4) 評価計画及び通知表等の表記

この時間のねらいを踏まえ、学校や学年の教育目標を達成するために、これまで述べたことをこの時間の学習活動の流れに沿って取り入れ、各学校において評価計画を組み込んだ年間計画等を作成することが、この時間の評価を考える上でポイントになると考える。年間計画等の作成の際は、図8に示すように、活動前の生徒のもつ力等を把握する診断的評価、活動中の形成的評価及び活動後の総括的評価の時間を設定するとともに、評価の観点等を生徒に知らせ、自己評価や相互評価を行わせる時間を適宜設け、生徒各自が自己の成長を実感できるような活動計画となるように工夫するとよいだろう。また、学習活動には短期的な活動と長期的な活動があるため、その長短も考慮し、評価を行う場面や時期などを工夫することも大切である。具体的には次項からの実践校の単元活動案などを参考としてほしい。

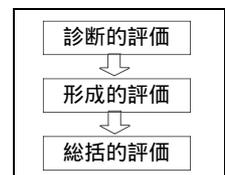


図8 評価の流れ

通知表については、指導要録と同様に、評価の観点等によって得られた生徒の進歩した点などを文章によって表記することが適当である。通知票への記載時期については、毎学期ごとに行うのが望ましいが、学習活動に長短があるため、各単元の終了時に評価したものを学年末にまとめて記載するなど、各学校の実情に応じて行うこととなる。

(5) 実践例 1

普通科高等学校における将来の進路を見据えた職業観の育成
- 先輩との懇談会を中心とした評価の取組 -

佐賀県立佐賀北高等学校

ア 研究の取組

(ア) 学校の概要

本校は、県庁所在地である佐賀市の中心部にあり、県内唯一の単位制の全日制普通科高等学校である。校訓「雄心・創造・挑戦」の下に、右に示す教育目標を掲げ、1万有余の卒業生を輩出してきた。現在、生徒数 1160名(普通科 26 クラス・芸術コース3クラス)の大規模の進学校であり、昨年度は国公立大学に 100 名余り、私立大学に 370 名余りが合格した。また、部活動も盛んで、運動部、文化部ともに全国大会等で活躍している。本校への進学を希望する中学生も多く、毎年 10 月頃に行われる中学 3 年生対象の志願校希望調査では高い志願率となっている。

本校の教育目標

真理を目指し、品位ある人間性の育成を図る。
個性を尊重し、創造性豊かな人材を育てる。
国際化時代に対応し、社会の発展に寄与する有為な人材を育成する。
誠実にして明朗・闊達な人格を磨く。
心身とも強健な人間に育てる。

本校では、学校の活性化及び特色ある学校づくりを目指して、昭和 59 年に普通科高等学校における推薦入試を他校に先駆けて導入し、昭和 63 年には普通科芸術コース(美術・書道・音楽)を開設した。また、多様化した生徒の個性や適性及び進路等に応じた教育を推進するため、平成 8 年に全日制の単位制を導入し、生徒一人一人の学習に対する主体性・自主性を高める教育活動の推進に取り組んでいる。

(イ) 本校における「総合的な学習の時間」の取組

単位制の最大の特色は、生徒が自らの興味・関心や適性に応じて主体的に履修科目の選択を行い、明確な目的意識の下に、生徒自身が適性や進路に合った自分だけの時間割を作り、意欲的に学習に取り組んでいくところにある。この特色を十分に生かし、教育効果を上げるには、生徒自身が自己の個性や適性を理解し、将来への明確な進路意識をもっていることが重要である。

本校では、単位制実施以来 6 年間、この特色を生かすために、多様な選択科目の設置や少人数指導等の工夫・改善、進路指導を目的とした個人面談を中心に据えた指導などを充実させてきた。しかしながら、履修科目の選択の際に、自己の進路を考慮せず、安易に科目選択を行う生徒が増えてきたように感じる。このことを踏まえ、主体的、計画的に取り組み、調査能力、思考力、判断力、表現力等を身に付け、問題解決のために学習や研究の方法を学ぶ生徒を育成したいと考え、全職員の共通理解の下、進路指導ガイダンスを中心とした「北高プラン」を作成した。「総合的な学習の時間」は、「北高プラン」において、自らの在り方生き方を考察する学習の時間(自分探しの時間)として設定した。「北高プラン」の概要を表 1 に示す。

「北高プラン」は、「行ける大学から行きたい大学へ」を合い言葉に、生徒の進路意識の向上を目指し、生徒の多様なライフスタイルを考慮に入れた指導となるように工夫している。具体的には表 1 に示すように、1 年次に生徒が将来就くであろう職業について研究し、2 年次に大学の学部・学科の研究を行い、3 年次に自らの進路や課題研究

表 1 北高プランの概要

	1 年次	2 年次	3 年次
教科・科目等	共通履修	選択履修(一部共通履修あり)	
総合的な学習の時間	【自己理解】 職業観の育成	【目標の確立】 学部・学科研究	【進路の確立】 進路・課題研究
特別活動	地域理解 (ボランティア)	国際理解 (修学旅行)	他者理解 (北高祭)

⇕は連携を示す

を行うように計画している。また、各教科等や特別活動との連携を図り、全職員の共通理解の下、ガイダンス機能の充実を図ることとした。

イ 本校の評価の観点等

現在、1, 2年次生については、「総合的な学習の時間」を時間割に組み込んで試行的に実施している。評価については今年度の研究として取り組んでおり、1年次生についてのみ行っている段階である。北高プランの1年次生においては、前項に示した教育目標を特に重視し、総合的な学習の時間のねらい等を踏まえ、評価の観点として「A 自己実現能力」「B 情報活用能力」の2つを設定した。また、これらの観点の下に、以下のような評価規準をA, Bそれぞれに2つずつ設定した。

A	自己の個性や適性をよく理解することができる。(自己評価力)
A	様々な職業について理解し、自己の適性に合った職業を考えることができる。(職業理解力)
B	自己の将来にかかわる職業に関する情報を自ら収集することができる。(情報収集力)
B	自己の将来にかかわる職業に関する情報を自ら表現(発信)することができる。(自己表現力)

評価に当たっては、学習活動の過程における生徒への支援的な指導を中心とした評価、すなわち、形成的評価が中心となるような評価にしたいと考えている。

ウ 活動の実際

(ア) 年間活動案(全35時間)

1年次の「総合的な学習の時間」における自己理解・職業観の育成を目指した年間活動案を表2に示す。1年次の学習活動は、全体指導を中心とした進路研究のオリエンテーションから始まり、コラムノートを使っての継続した指導や春と秋の進路啓発講演会を行った後、先輩との懇談会及び成果発表等で計画している。なお、12月で1年次のプランは終了する。

「コラムノート」とは新聞のコラム等を用い、生徒の視野を広めるとともに情報収集力や自己表現力を培うことを目的としたものである。毎月1~2回の実施を目途として、教師側(主に国語科教師)が新聞等から選んだコラムを生徒に提供し、生徒はそれに対する感想や意見を各自のコラムノートに述べるというものである。また、2年次から文系・理系に分かれるため、その指導の一環として「オープンキャンパス参加」と「大学出前講義」を実施し、担任や教科担任等との個人面談及び「選択教科ガイダンス」も取り入れている。10月以降の主な学習活動は単元名「先輩との懇談会」として実施しており、その詳細は次項に示す。

表2 1年次の年間活動計画の概要

月	活動(単元)計画	生徒の主な活動形式	担当	配時	評価の観点	
					A	B
4	進路研究のオリエンテーション 将来の夢を語る	講義 作業	1年学年団 担任	4時間		
5	進路啓発講演会 個人面談指導	講演会 面談(随時実施)	進路指導部 担任	2時間		
6	進路情報の収集の方法 コラムノート	講義/作業(インターネット利用法) 作業(毎月1~2回実施)	担任 ガイダンス係	1時間 13時間		
7	オープンキャンパス参加 大学出前講義	体験/作業(報告レポートの作成) 講義	進路指導部・ガイダンス係 "	3時間		
9	選択教科ガイダンス 職業別グループ分け	講義 講義/作業	教務部 担任	1時間 1時間		
10	第1回職業研究分科会 第2回職業研究分科会 進路啓発講演会	グループ作業 講演会	ガイダンス係 進路指導部	2時間 2時間		
11	選択教科本調査 先輩との懇談会	作業 講義・質疑	担任 ガイダンス係	1時間 2時間		
12	職業別グループでの話し合い ホームルームでの発表会	グループ作業 発表・作業	ガイダンス係 担任	3時間		

ゴシック体の文字は単元名「先輩との懇談会」における学習活動である。また、配当時間(配時)は一応の目安である。

(1) 単元活動案 単元名「先輩との懇談会」(全8時間)

1年次の10月から職業観の育成を目指し、表3に示すように、全8時間の学習活動として「先輩との懇談会」を開催している。「先輩との懇談会」は、県の高等学校活性化事業の一つである「生き生きハイスクール 21」事業の計画段階において、「後輩にぜひ話をしたい」という本校同窓会(北楠会)の意向により実現したものである。この学習活動は、生徒の進路意識の向上を図るため、いろいろな職種の方(本校卒業生)を招聘し、その職業について話を聴く活動であり、今年で3回目の実施となる。

講師は、歯科医、看護婦、薬剤師、県庁職員、警察官、ホテルマン、美容師、司法書士、新聞記者、画家、音楽家、建築技師、システムエンジニア、小学校教師、高校教師など、多様な職種の方をお願いしている。表3に示すように、まず生徒の希望を取り、同じ夢をもつ20班程度の職業別グループに分け、グループごとに調査活動を行った後、先輩との懇談を行う。先輩との懇談はわずか2時間という短い時間であるが、その際に必ず1人1つ以上の質問を行うよう指導している。また、事後の活動として、職業別グループごとに意見等をまとめさせ、それを自分のクラスに持ち帰って発表するなどの活動を行うとともに、各講師に対する礼状を書かせている。指導の際は、単なる就職指導ではなく、職業を通じて自己実現を図ることを目標とした支援的な指導が中心となるように留意している。

表3 「先輩との懇談会」単元活動案の概要

学 習 活 動	学 習 内 容 等	評価の規準	支援・評価方法
職業別グループの編成	情報冊子の利用方法	A , A	ワークシート
職業研究分科会 職業別グループで情報の収集や意見交換を行う 選択した職業に関する疑問点や情報の収集を行う	「なるにはBOOKS」の活用方法 有益な意見交換や情報収集の方策 書籍の検索方法 インターネットの活用	B , B	自然観察法 ワークシート
先輩との懇談会 聴講 質疑応答	話の要約や記録の方法 質疑応答のマナー (質問を1つ以上する)		自然観察法 ワークシート
職業別グループでの話し合い	グループの意見のまとめ方	A , A B , B	自然観察法 相互評価 ワークシート
礼状の発送	礼状の書き方		実験観察法 自己評価 ワークシート
ホームルームでの発表	意見の要約、発表の方法		

(ウ) 評価の実際

a ガイダンスノート

本校では、ガイダンスノート(ベーシックポートフォリオ)として、B4版の厚めのクリアブックを入学時に全生徒に配布している。このガイダンスノートには、4月当初に行う進路研究のオリエンテーションで配布する「北高プラン」の概要と目標及びノートの作成方法のプリントを最初のページにファイルさせ、各学習活動において用いるワークシートを次のページから時系列にファイルさせている。先輩との懇談会において使用したワークシートの内容を表4に示す。

表4に示すように、学習活動に関する生徒の関心・意欲・態度などを教師による自然観察法や実験観察法を中心に見取るとともに、ワークシートをファイルしたガイダンスノートにより、設定した評価の観点や規準を基に評価を行っている。また、図1に示すように、

表4 先輩との懇談会時のワークシートの内容

1 あなたが選んだ職業は何ですか。先輩の話の内容に関するメモを取ってください。
2 講師への質問は適切にできましたか。また、質問に対する回答で得たものは何ですか。
3 講師の話を聞いての発見や感想、新たな決意などを書いてください。
4 今回の先輩との懇談会における反省(自己評価)を書いてください。
5 2年次に向けてのガイダンスへの要望を書いてください。

ワークシートには担当者のコメントの欄を必ず設けており、コメントを入れて返却するようにしている。このコメントは生徒にとって有効な支援（アドバイス）となっている。

b 通知表と指導要録

今年度からの新たな取組の一環として、通知表及び指導要録への「総合的な学習の時間」の評価を取り入れ、平成 15 年度からの本格的導入へ向けた準備を進めている。通知表については、学年末にこの時間の評価の欄を設け、活動の過程で進歩した点などを文章で記述し保護者に通知する予定である。また、指導要録については新教育課程対応の指導要録がないため、試行的ではあるが、現行の指導要録の各教科・科目等の学習の記録の部分にこの時間の単位を記入する欄を設けることとし、「総合所見及び指導上参考となる諸事項」の欄に通知表と同様な文章を記述することになっている。また、その記入の仕方については、次のような文例を参考にし、各担当者が記録した観察記録と生徒が作成したガイダンスノートを活用して、担任が生徒一人一人の進歩した点などを具体的に記述することになっている。

図 1 コメントを入れたワークシート

- (A の例) ガイダンスノート等を用いて自己を客観的に評価する力が向上した。
- (A の例) いろいろな職業をよく調べ、自分が就きたい将来の職業をよく考えるようになった。
- (B の例) インターネットや書籍を用い、情報を収集し読み解く力が向上した。
- (B の例) 自らの考えをまとめ、的確に表現することのできる文章力や自己表現力が向上した。

エ 考察

(ア) 実践の成果と生徒の変容

「総合的な学習の時間」において、活動のたびに作成させたワークシートにより、これまでやや表面的になりがちだった進路指導ガイダンスを、生徒一人一人の視点から多面的かつ内面的に充実させることができるようになった。その結果、多くの生徒が自己の進路について意識し始め、書籍やインターネット等を用いた情報収集活動や先輩との懇談会等を通して、自信をもって自己の在り方生き方を考えるようになってきたようである。特に、具体的に自分の夢をもった生徒は、その実現のためにどのような科目を選択し、どのような努力が必要なのかを考え、その夢に向かって歩み始めている。このようなことから、ベーシックポートフォリオとしてのガイダンスノートを中心とした評価は、支援的な指導を中心とした評価法として有効であった。また、各ワークシートに設けた、評価の観点等を踏まえた担当者のコメントは、生徒にとって将来の進路を見据えた科目選択をはじめとする高校生活の過ごし方のよき支援（アドバイス）として、有効に働いているものと考えられる。

(イ) 今後の課題

時系列にファイルしたガイダンスノートによる評価方法は丁寧ではあるが、時間が掛かりすぎるため、生徒自身の手によってガイダンスノートを要約させたサマリーポートフォリオを作成する必要がある。これは、情報活用能力としての情報要約能力、情報選択能力を高めるためと、担任の評価作業に掛かる時間を短縮させるためにも必要なものであると考えている。また、自己評価力を向上させるための自己評価表や相互評価表を工夫・検討し、作成する必要があると考えている。

(6) 実践例 2

「総合的な学習の時間」を代替した「課題研究」の評価の検討について

佐賀県立有田工業高等学校

ア 研究の取組

本校では、平和で民主的な社会の形成者として、個性豊かで人間愛に満ち、国際的視野に立って社会に貢献できる、心身共に健全な人間を育成することを目標としている。この目標を実現するために教育方針として「ものづくりによる人づくり」を掲げ、平成元年度より「課題研究」に取り組んできた。本研究は、この実践を積み重ねてきた「課題研究」を「総合的な学習の時間のねらい」を踏まえたものとするために、新たな展開方法や評価方法の開発を目的とするものである。

(ア) 代替した「課題研究」で育てたい資質や能力

工業教育は本来、「ものづくり」という、人類の歴史や人間の文化を発展させてきた営みを学校教育の中に取り入れ、ものづくりの楽しさや素晴らしさを認識させ、その基礎的・基本的な知識と技能を習得させることを通して人づくりを行うものである。本校が平成元年度から取り組んできた「課題研究」とは、学問的に体系化され客観化された技術を理論的に学び、実習等の具体的作業を通して実際にその技術を使いこなす技能を身に付けさせ、その集大成として生徒が主体的に課題を設定して計画を立て、問題を解決するというものである。平成15年度からの新教育課程における「総合的な学習の時間」の導入に伴い、この「課題研究」で代替することとし、現在まで実施してきた「課題研究」の展開方法や評価方法（特に自己評価法）を更に発展させることとした。代替した「課題研究」では、新学習指導要領に示された「課題研究の目標」と「総合的な学習の時間のねらい」を十分に踏まえることにより、工業技術者として必要な職業観や倫理観を有し、工業技術の継承と発展に対して貢献することのできる創造的な能力と態度をもつ人材を育てたいと考えている。

(イ) 本校の「課題研究」の取組

「課題研究」は、現教育課程より実施され、高い評価を受けてきた。新教育課程におけるその目標は、現行のものと同じであり、高等学校学習指導要領に次のように示されている。

工業に関する課題を設定し、その課題の解決を図る学習を通して、専門的な知識と技術の深化、総合化を図るとともに、問題解決の能力や自発的、創造的学習態度を育てる。

この目標からも分かるように、「課題研究」は工業のすべての学科にかかわる総合的な科目であると言える。また、高等学校学習指導要領解説の工業編において、「課題研究」では、次のような資質や能力の育成をねらいとすることが示されている。

工業に関する基礎的・基本的な学習の上に立って、工業に関する課題を生徒自らが設定し、自らその課題の解決を図る学習を通して、専門的な知識と技術の深化、総合化を図るとともに、問題解決に向けて意欲的に取り組む能力や自発的、創造的な学習態度を育てることである。

指導に当たっては、生徒自らが、工業に関するテーマを設定し、計画を立て、製作や調査・研究などを行い、結果を整理・発表し、研究を深めさせるとともに、自分で課題を見付け、自ら学び自ら考え、主体的に判断し、問題をより良く解決する資質や能力を育成することが大切である。

以上のような目標やねらいに基づき、本校の「課題研究」では、社会の中で主体的に生きていく力、課題に対しての問題解決能力などを身に付けさせるために、調査・研究・発表を中心とした学習活動を展開している。当然のことながら、生徒の設定する研究内容は多種多様であるため、担当者1名では十分な指導はできない。そのため、特に調査・研究時には、工業科の教師だけでなく、必要に応じて理科、地歴、保健体育、家庭などの教師の援助や地域社会の企業、研究施設等との連携などを行い、学習活動に広がりができるように指導や支援を行っている。

イ 本校の評価の観点と評価方法

アの(ア)で述べたような技術者の育成を目指すため、本校では、「課題研究」の活動計画に沿って、次のような観点を設定し、評価を行っている。

ア 研究テーマ設定能力	イ 調査能力	ウ 自己探究能力
エ 自己表現能力	オ 自己評価能力	カ 関心・意欲・態度

「課題研究」は、生徒自らが設定したテーマを試行錯誤しながら創意工夫を重ねて解決していくという学習スタイルを取るため、場合によっては評価が難しいケースがでてくる。しかし、多くのきめ細かい情報を得て生徒を多面的に評価すれば、生徒一人一人の学習意欲を高めることができると考え、上記の観点を基に、研究の進行に合わせて生徒自身による自己評価などを行い、教師による評価を加えて総合評価を行っている。具体的な活動に対する評価の方法や評価の規準については次項で示す。

ウ 活動の実際

(ア) 代替した「課題研究」の年間活動計画

活動計画	主な活動内容	評価の方法	評価の観点
4月～5月上旬 課題研究の導入	希望調査より研究グループ・課題研究テーマの決定 予備調査・研究の実施、テーマ設定理由・実施計画提出	・調査面接法 ・ガイダンス(面接法)	ア：研究テーマ設定能力 カ：関心・意欲・態度 イ：調査能力 ウ：自己探究能力
5月下旬 ～7月上旬 調査研究活動	実施計画に基づく文献調査・現場調査等を実施 合同検討会(中間発表会)を実施し、生徒・職員全体で検討を行う	・自然観察法 ・ガイダンス(面接法) ・実験観察法 ・ガイダンス(面接法)	イ：調査能力 ウ：自己探究能力 エ：自己表現能力 オ：自己評価能力 カ：関心・意欲・態度
7月下旬 ～12月上旬 研究活動	調査研究活動を受けて、研究・実験・作品制作等の自主的な学習活動の実施 研究グループ内検討会の実施	・自然観察法 ・ガイダンス(面接法) ・実験観察法 ・ガイダンス(面接法)	ウ：自己探究能力 エ：自己表現能力 オ：自己評価能力 カ：関心・意欲・態度
12月下旬 ～1月上旬 研究のまとめ	生徒たちの卒業作品展の準備委員会の発足と、生徒自身の研究や作品制作の過程を示すキャプション・説明パネル等の作成 卒業研究集の原稿作りと、作品展の案内状発送の実施(ポスター・パンフレット作成)	・実験観察法 ・ガイダンス(面接法)	エ：自己表現能力 カ：関心・意欲・態度 エ：自己表現能力 オ：自己評価能力
1月下旬 卒業作品展と研究発表会の実施	九州陶磁文化館での一週間にわたる卒業作品展の実施(生徒による会場作品のレイアウト・会期中の受付) 研究発表会を実施して研究成果について検討を行う	・実験観察法 ・ガイダンス(面接法)	エ：自己表現能力 オ：自己評価能力 カ：関心・意欲・態度
2月上旬 研究集発行	卒業研究集としてPCを用いて入力し、印刷製本の依頼をする	・実験観察法 ・ガイダンス(面接法)	エ：自己表現能力

(イ) 評価の実際

a 研究テーマ設定能力の評価

本校では、4月当初に生徒に対して将来の進路を見据え、作品制作、調査・研究・実験を研究テーマとした「課題研究テーマ希望調査(研究テーマとその設定理由及び卒業後の進路希望等について)」を実施している。留意点としてテーマと進路をできるだけかわらせることとしている。

「課題研究テーマ」を提出させた後は、これを基に学科会議で検討し、生徒へのガイダンスを通して各専門分野と研究グループ・課題研究テーマを決定していく。ここでは「研究テーマ設定能力」を見ることとし、下記の5つの規準を基に学科会議において検討、評価を行っている。

- | | |
|----------------------|--------------------------|
| 1 研究に用いる施設・設備を考慮している | 2 研究にかかわる費用の概算を見積もっている |
| 3 研究完成までの時間配分に無理がない | 4 自己の進路等を加味した研究テーマとなっている |
| 5 主体的、計画的な課題を設定している | |

b 調査能力の評価

生徒は課題研究のテーマが決定した後、予備調査・研究等を行い、研究テーマとその設定理由及び実施計画を立案し、担当者にそれを提出する。そして担当者の指導助言を受けた後、立案した実施計画に基づいて、研究テーマについての文献調査や現場調査等を実施する。その後、合同検討会を実施し、研究テーマ・研究方法等について生徒・職員全体で検討している。この合同検討会では、次の4点について発表させ、調査能力についての評価を行っている。

- | | |
|---------------|---------------|
| 1 研究テーマ設定の理由 | 2 調査等で取り組んだこと |
| 3 現時点での課題・問題点 | 4 今後の目標 |

これを受けて、担当者による評価を次の規準で行っている。

- | | |
|-------------------------|------------------|
| 1 調査した内容が十分である | 2 調査に対する取組が十分である |
| 3 今後の調査方法及び計画が適切になされている | |

c 自己探究能力の評価

調査研究活動を受けて、研究・実験・作品制作等の自主的な学習活動を行っている。研究グループ内では随時担当者の下で検討会を行わせ、これまでの研究の成果や研究の不十分な点などについての振り返りや他の生徒の評価(相互評価)を行い、生徒が自己の研究活動を十分に認識できるようにしている。また、日々の研究の経過や生徒自身の思考の変化等を記録するために、ベーシックポートフォリオとしての「課題研究ノート」を作成させている。この「課題研究ノート」には、次のような項目を記入させ、それに対する担当者の所見を示し、その後の検討会や評価の参考としている。

- | | | |
|----------|---------|-----------|
| 1 今日の目標 | 2 研究の内容 | 3 研究の自己評価 |
| 4 反省・気づき | 5 次回の計画 | |

これを受けて、担当者による評価を次の規準で行っている。

- | | |
|----------------------|------------------------|
| 1 計画的、継続的に研究に取り組んでいる | 2 振り返りによる気づきをうまく活かしている |
| 3 他者の意見をうまく採り入れている | 4 独創的なところが見られ、かつ客観性がある |

d 自己表現能力の評価

本校での課題研究の発表は、例年実施している九州陶磁文化館での卒業作品展、それを受けた研究発表会、そしてサマリーポートフォリオの代替としての卒業研究集の発刊と3つの発表の場を設定している。これらの発表の場を前述の6つの観点を総合的に見る場としても位置付け、それぞれの発表の場において次の規準に基づいた全担当者による評価を行っている。

- | | |
|--------------------|---------------------------|
| 1 これまでの研究をよく整理している | 2 研究の内容を分かりやすく発表している(観客誌) |
| 3 自分なりの工夫や改善をしている | 4 課題作品の達成度には満足のいくものがある |

e 自己評価能力の評価

課題研究発表会終了後に、1年間の研究を振り返るための「課題研究自己評価」と「課題研究アンケート」を実施している。「課題研究自己評価」では、次の規準について生徒に自己評価させている。

- | | | |
|----------------------|--------------------|---------------|
| 【実践】1 課題設定が自主的にできたか | 2 遅刻等なくよく出席したか | 3 自ら進んで取り組んだか |
| 4 工夫やアイデアを生かせたか | 5 学習の目標や内容が理解できたか | |
| 6 計画どおりできたか | | |
| 【結果】1 資料調査や研究がよくできたか | 2 結果や作品が目標どおり完成したか | |
| 【報告書】1 期限内に提出できたか | 2 学習の記録やまとめがよくできたか | |

また、「課題研究アンケート」では、次のような規準について自己評価させている。

- | | |
|--|---------------------|
| 1 テーマの設定は適当か | 2 研究計画をどのように立てたか |
| 3 研究日誌や資料などは、きちんと整理されているか | 4 意欲的・積極的に取り組めたか |
| 5 自分の知らないこと、難しそうなことに積極的にチャレンジする自信が付いたか | |
| 6 研究を進める中で、どの様な点に興味・関心をもったか | |
| 7 研究の途中で分からないこと、うまくいかないことをどのように解決したか | |
| 8 研究を進める中で、今まで知らなかった知識や技能が身に付いたか | |
| 9 研究を進める中で、自分のアイデアが役に立ったか | 10 研究の成果に満足したか |
| 11 『課題研究』で努力したことや身に付いた能力・技術がこれからの学習や生活にどの様に役立つと思うか | |
| 12 『課題研究』が終わった後、何か目標を決めて研究してみたいことがあるか | |
| 13 はじめに計画した目標がどの程度達成できたか | 14 研究内容や結果が十分理解できたか |
| 15 卒業制作展の準備を自主的に行うことができたか | |
| 16 『課題研究』を通して今までと変わったところがあるか | |

これらを受けて、各担当者が同様な規準をもって評価を行い、総合評価の参考としている。なお、ここに示した規準は、生徒による自己評価を考慮して示したものである。

f 関心・意欲・態度の評価

関心・意欲・態度の評価については、学科会議において決定された次の規準を基に行っている。また、生徒自身による自己評価等を参考にして総合評価を行っている。

- | |
|--|
| 1 課題研究に対して主体的に取り組んでいる（出席状況、学習態度等） |
| 2 活動の過程において問題点等が生じたときにも意欲的に活動している（課題研究ノート、活動状況等） |

(ウ) 総合評価と指導要録・通知表

本校では課題研究を必修科目としており、5段階評価による評価を行っている。「総合的な学習の時間」の代替とするに当たり、以上のことを踏まえて課題研究の評価を行うが、学習過程における進歩した点などを通知表や指導要録へ文章によって記述するかどうかについては現在検討している。

エ 考察

(ア) 実践の成果と生徒の変容

生徒は、学習活動ごとに記録する「課題研究ノート」を利用することで、自己の研究経過や思考の変化等を自ら振り返り、自己評価力や研究テーマ設定能力等を向上させることができた。学習活動を展開するに当たっては、生徒たち自身が、学校内に留まらず学校外の様々な人々や施設等にも直接又は間接的に接する場を数多く経験し、自分の進路や意欲に合わせた多様な研究テーマを設定したために、より創造的な態度で課題研究に望むことができた。また、取組の過程で発生する様々な問題や課題などを互いに議論し合いながら解決していくことで、他者を尊重し理解する気持ちがはぐくまれ、達成感や連帯感が育ってきた。さらに、観点等を踏まえて生徒の考察の過程や行動を複数の目で観察し、いろいろな場面できめ細かい評価をすることで、生徒のもつ隠れた能力を発見するなど、思わぬ副産物も得られた。

(イ) 今後の課題

課題研究の進展に合わせてきめ細かい評価を行うために、時間が掛かり過ぎる場合や、観点が多過ぎて総合評価の際などに混乱する場合があるので、効率化して分かりやすい評価方法を検討する必要がある。また、「課題研究」を評価する場合、研究の成果はもちろんであるが、「生きる力」を育成するための重要なポイントとして、生徒自身による試行錯誤や思考の過程を見取る評価を更に工夫・検討する必要がある。生徒自身が自己を意識し、自己実現の意欲を高め、社会の中で自分がどう行動すべきなのかを考える機会となるような評価をすることが必要であり、それらのことが「生きる力」を育てることにつながっていくものと思われる。

6 高等学校の研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

教育課程審議会の答申や文部科学省の通知及び学習指導要領に示された「総合的な学習の時間」の評価の進め方や考え方について、評価の観点や評価規準を定める際の方策の例を示すことができた。また、生徒が身に付けた力を観察法、面接法及びポートフォリオ評価で評価していく際の考え方についても示すことができた。

これらを踏まえた実践校の取組にもあるように、「総合的な学習の時間」の活動計画に評価の観点や評価規準等を組み込んだ学習活動を行うことにより、複数の教師による生徒一人一人への支援的な評価が充実できたようである。また、学習活動の際に生徒一人一人に作成させるポートフォリオ（ガイダンスノート、課題研究ノート、卒業研究集など）を有効に活用することが、支援的な評価のみならず個人内評価をする際にも大変有効であると言える。

(2) 今後の課題

「総合的な学習の時間」において、多面的・多角的に生徒一人一人を評価する上でポートフォリオ評価が有効であると考えますが、観点等を踏まえた評価をする際に、時系列にファイルしたベーシックポートフォリオだけでは効率的な評価が難しいことが実践例においても示されている。このことを踏まえ、「総合的な学習の時間」の評価の原則である個人内評価を効率的に行うためにも、サマリーポートフォリオを用いた評価や自己評価及び相互評価の視点や考え方などを更に検討する必要があると考える。

《研究委員》

蒲原 正憲	佐賀県教育センター研究員	平成13年度
緒方 秀樹	佐賀県教育センター研修員	平成13年度
高瀬 昌郎	佐賀県立佐賀北高等学校教諭	平成13年度
長友 主税	佐賀県立有田工業高等学校教諭	平成13年度

《参考文献》

- ・ 文部省 『小学校学習指導要領解説 総則編』 平成11年 東京書籍
- ・ 文部省 『中学校学習指導要領解説 総則編』 平成11年 東京書籍
- ・ 文部省 『高等学校学習指導要領解説 総則編』 平成11年 東山書房
- ・ 文部省 『高等学校学習指導要領解説 工業編』 平成12年 実教出版
- ・ 佐賀県教育センター 『研究紀要第25集別冊』 2001年3月
- ・ 細谷 俊夫・他編 『新教育学大辞典』 平成2年 第一法規
- ・ 寺尾 慎一編 『生活科・総合的学習重要用語300の基礎知識』 1999年 明治図書
- ・ 森 敏昭・秋田喜代美編著 『教育評価重要用語300の基礎知識』 2000年 明治図書
- ・ 鈴木 敏恵著 『ポートフォリオで評価革命！ - その作り方・最新事例・授業案』 2000年 学事出版
- ・ 高浦 勝義著 『総合学習の理論・実践・評価』 2000年 黎明書房
- ・ 宮崎 猛編 『高校「総合的な学習」研究と実践の手引き』 2000年 明治図書
- ・ 月刊高校教育編集部編 『高等学校「総合的な学習の時間」実践の手引き』 2000年 学事出版
- ・ 小島 宏・寺崎 千秋編 『総合的な学習の評価計画と評価技法』 2001年 明治図書
- ・ 佐野 金吾・小島 宏 『新しい評価の実際3～総合的な学習の評価～』 2001年 ぎょうせい
- ・ 小田 勝己著 『ポートフォリオ学習と評価』 2001年 学事出版